羣書類從

二百卅六

和書門
類
九五九五
號
二〇四
函
六
架
六七〇
冊

内閣文庫
和書
類
九五九五
號
六七〇
冊
二四
函
一七
架

内閣文庫

番號	和	9595
冊數	670 (299)	
函號	214	39

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

辯書類從卷第二百三十六

和歌部九十一　家集九

検校係己一集

前大納言公任卿集

春日行幸殿上乃人々いまたまうけさせ
給はぬほとにこの里に花ゝ菊のさかりに
同し所に紅梅さかりなるをみてこの花
をもてたりけるを女御子の乃ゝ
[illegible]

東京帝國大學圖書之印

うへもなくてむかうせいを生とをいはまをこゝに出ま
雨のうちにこゝにこゝろの梅ちるのをこゝに来て
山里の梅ちるをあはれとおもひたるをもらして
二月上梅の咲さうけるをこゝ前の梅をおしむ
つゝみたる
ちるを先や春はかぎりなるあはれ花もうつろふ色はあらそ
あるをもえをこゝに活こゝろる人やあるこゝ活ひは
ものをよけるる
幹
おなじ所をいつこゝにるん花をこゝぬすみのこゝろはひまの
ひくこゝろをこゝうこゝるをこゝ人もをくこゝ中たるこゝをこゝれを

もるをあるこゝ梅をこゝうねをこゝとをかりけるこゝ
よりこゝをこゝ嘲をこゝしをこゝひつをこゝるをこゝ人をこゝ
こゝるをあるこゝ梅をこゝ
濃こゝ所をこゝ
はこゝひをこゝをこゝ
こゝるをこゝ梅をこゝ
こゝるをこゝ
こゝるをこゝ
こゝるを

[illegible]

[illegible]山院[illegible]春宮[illegible]

[illegible]

[illegible]

中宮のうくひすなるべしや

めづらしきかの春は花の色にあらぬ雪のみ降るに

思ひもよらぬ雪のいとしろく降りて

花の咲きたるやうにもあるかな

雪の降りて梅の花の咲きたるやうにもあるかな

二月十日ばかりに梅の咲きたるを見て

春ふかみ風にまかせて散りぬとも

なほ梅の花ぞ思ひ出でまし

春の雪の降りたるを見て

春の雪の降りて花の咲きたるやうにもあるかな

二月ばかりに雪のいとたくさん降りたるを見て

春の雪の降りて花の咲きたるやうにもあるかな

雪の降りて梅の花の咲きたるやうにもあるかな

春の雪の降りて花の咲きたるやうにもあるかな

そちらの方に花の白河の法師
我が宿は花ぬすびとたちぬべし惜しむ人なし
道貞

山里のあるじ遍照
折人の花をもとめぬ春の来
又読人しらず
ちる花をかりけるあるじ花にいとはしき
人しらず
人ちりぬ花ぞ形見とながめんと
花ぞ見しかしこ清らけるあるじ
貞道
つもれるかたまりたるあるじ

おなじ人のそしなるとき
人しらず
ちる花の山里にのこりなるあるじ
あるじ
ちりぬるかたまりけるあるじ
ちりぬるかたまりけるあるじ
人しらず
今日ふるあめにちる白河の雪ふるあるじ
白河の法師
春雨のふるあるじ
玉河の水ぬるあるじ

後とゝ人のかたらひてまゐりたるに
式部丞の家の中将の君のもとにまゐりけるに
とゝの乃ぬるゝ河の道にて
うへ〜
花乃色やさきかはるらんとおもふ
三月十日ばかり侍乃家に仏まうでに女房ども
ものいとゝけるふるさとの月おもかげ
風乃変なとけるに女房ども
ゆるすゝゝ河の道にて
ゝゝあるとこにて

春乃来たりけるに山風の吹まのゝ花ちるを
春ゝまたゝ花乃来きてあるとて
はるゝ愛けるはなのやどに
兼坊　貝
すゝゝひのさもるゝ
ゝゝひて
よもすゝゝ愛ける花と湖のあるゝ
よるふゝまさもものゝ
水ゝゝ橋乃ひの家の道に花乃ちるをける
とゝ梅井
湖ゝゝ春の淀乃浦ゝ花のちるゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三井寺にまうでしに、[illegible]

けさは花のさかりなるべし

[illegible]

[illegible]

白河にまうでしにおりて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

高遠

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

長谷

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春[illegible]

[illegible]

五月

[illegible]

七月七夕

[illegible]

[illegible]

七月七日

[illegible]

[illegible]

秋[illegible]

[illegible]

[illegible]

道長

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

故殿[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan

[illegible]

年毎[illegible]

八月十五夜月成[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八月十五夜

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

白河法皇御幸ありて大原の花をもてあそばせたる
にそうしの人のもとにやりたる
ゆきてもみる雅の御里の山里のあはれをそ
人〳〵
いつこともなくてもてあそぶ道なれは秋はきにけり
菊の花ことのはをもてあそぶ秋の日をもて
ゆかしきものとて金の菊をもてあそばせたる
あるはきをうつすもの九月九日
信実朝臣の宣旨をうけたる
かたのもとにあるはきをたるを見て
信実朝臣の乃ちかの花をもてあそぶ
又水の流るるもまきらる
秋ふかき河のほとりにて流れをもてあそぶ
五月の雨乃石山まうでの夜上人きて
ものをもとめいきたりしかとも
見れども物をもとめいてるあるかあるの人
高頼
なきあるを
たるをみやこの紅葉に教て重陽の日まとまる
新古
秋ふかき日山路にくる
ものをもとめて

九月はつる日かの人のもとにつかはす　庚申

めかれこそしひ出なれはよもすがらとこねはいかなる夢の

九月廿日初雪をよめる

極月の後の雪の初雪をけさこそ見てとこ敷ものかな

女御殿りしの人〳〵

花ならぬ雪のもとにや何事も極月の秋いとゝ思ひけり

九月晦日の日秋のをしむ色の中にはなをとゝ

口ずさ

何方に秋をしらしの宮小こゑの色をとゝ

九月つこもりの十月朔日の日うゑ　兼澄

はすこうしす

光乃のとゝ寿のゆうたちとうこうとゝ

をとゝ

はるのも程へにる秋の色今朝の霧

うゑ

霜かゝる葉はの花ゝ秋の色ゝ春の花の色ゝ

山里に行て色乃きくに成ける

紫陽花

ゑゝ色のきくに成けり二枝乃葉ゝ

月乃ゝきくに成ける

おくゝる花にあるゝ月乃影ゝきくに成ける

おゝ人

のうるる月の面のせうく我ひたる義そ拭ひ前の白きく
法師にまうくて弟育あらくみまく
於湖ほまを風のこゝろ寄きて安りみち義さてひ人うるゝ
十月朝日殿上人丹まいきたるを
義清のゝ給ふ歌共を出ひたるけるを扶ちとけ
いくのちうるをきてみてこゝなりうるをたを
暮間るを拭ひてうるを花菊おれなくのむい事を聞て花
長谷に入給ひて後中納言の面のうるひて四合
なのみをそ心うるをすうたるをる
みをとをたうの人を屋風屋の暮ゆみ風屋のきをみを

所の面
風ひく暮ゆみをとをたうをあてをみく扶
い月十五夜乃みをあるをもをうゝ乃
暮のをとをを花をのををうをいををうく
をを風ひ浦のをを有をを道の扶をを花ををうゝ
なををを紅の風ひ例の事をもあゝひ
人の面ををうををあゝををあるをいみ
ををめをたう紅ををうるけるゝ花暮
浦を給へのけるをの和を乃ひをあをを花中
納言乃ひををあるを

[illegible]

[illegible]

三井寺にて入道の中将成信の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春もうゝ[illegible]

十月初時雨

わらくよりこそはけるな

[illegible]

[illegible]

[illegible]

雪のうちめくり降たりける女房

[illegible]

[illegible]

初雪

雪成

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月新の出るを[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おく山とちかくなりて夏ゆきにくらしは時雨のして
[illegible]

雲ゆくぬ伊勢屋にかさもとをしは嵐のうしと云へる
禅林寺にて西よ雲の消ぬるうへ
[illegible]とをくなるつゆ
雲はなれ[illegible]ゆきにくらしは雨消のこゑ
[illegible]

人のうちなるきゝ[illegible]ゆきは雲しまつ消ぬ
雲深[illegible]

[illegible]

白雲[illegible]のはるかに降る宿もけるの花
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の陰はるかにあるそなる
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

白山をよそに見つゝ越前国へ今はの
雪のこゝろ[illegible]

後拾遺 [illegible]

散通

[illegible]

雪つもる春の来ぬるもとつ山
あまつのはしのかけるなり
[illegible]
[illegible]

[illegible]

長谷ふせ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

玉

九重[illegible]

[illegible]

同

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

焦尾琴

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鳳雅

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋とてたなびきてとまりけり

白行の白雲にやおくさのつゆのたまりて

ときこそ行ゐるとけれ

つねなるものとやなすのうきもじ迄にも葉ぬ

あるかな

新古

ふるさとにしるしるる雪やはるるんとてこなたにてこゆ

ちよのあるまつのかのはるのきたりひとして

ちとせをかさねるとそきこつる春はすこしを遊

ぬ

ふるきのうちのあれ路人きそこてのひとのいつる

をやらしたきせ侍りしとてやとりて

四人へ

おもひのはるるあれ路人事も我ゆゑにとてとうかる

ゆ

けるのなるとあれ路人のおもの葉ちあるみ風の便て

ゆ

ゆ

ゆ

ゆ

新後撰

風つくしのみちやとをとこ合にてのくたなとをあ

ゆ

同

[illegible]

知る〜人もあるべきなりとて

[illegible]

頼忠

[illegible]

[illegible]

[illegible]

別路にいりたつまれぬ中くるゝ年のくれゝ共
たいあるまゝにて行らのみけるふ水鶏
拾
雲居なる神ふるさゝのかゝものうへもとゝ社やまと
ゆ子ゝ人もあるゝ所ゝ所ゝ雨はうつる雨にまつ世てゝみる
ゆきまよる
みなれ川のゆきまくれん水鶏の雨てくけくゝ数ゝてゆ也
ゆきのくれ
人ゝまとゝつゝ心ゝのあるゝ所ゝ花ゝるゝ所ゝ涙ゝ
なゝひくゝゆゝるゝきゝこゝてゝゝうゝ
雪ゆきまねゝくゝ心里のゝなゝれやゝきのゝもとゝるゝ跡のゝゝ後
みちのくにゝうゝゝゝゝたゝふゝとゝてゝゝゝくく
拾
雪積ゝゝ下ゝゝゝゝ人ゝゝゝゝ数ゝ乃ゝ厚ゝ雪ゝゝゝゝゝゝは
ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

朔日ごろ山里のあたりにまかりたるに
雪のいとたくさんにふりたるを
人のもとへまかりたるつとめてのかへり
しいとまけるころ
くやくやとかへりてのち雪のいとたくさんにふりたるを

拾遺

ふるさとは雪のしたにうもれつつ
春をしるかの人のあとかな

拾遺

中にあるまきのとをあけてみるに
あるかなしさ

白川にまかりたるに雪のいとたくさんにふりたるを
人のもとへまかりたるつとめてのかへり
しいとまけるころ
くやくやとかへりてのち雪のいとたくさんにふりたるを

人〻
見ひとの色をあらそはぬ春の雪
まことの花のかをりなりけん
ものの花をこそ春はをしけれ
水のなかるるものとこそ
秋のきてのちの海の花をこそ
なりもの乃はものの
物のあはれをしるものとして
東三条
女院の宮中の宴に大和歌のことをかけるかつけそ

拾遺

春の代の今はかぎりとおもへども
ゆく末をいのりあらまほしけん

院うをのひて文乃ゝ二月初子の日女房
乃ゝとて
長
ゝれ行ゝまわをもゝ乃ゝ雪乃ゝ川ねひ乃ゝ
ゝ乃ゝの中物すもゝてはゝてゝ夫兵ゆき
成
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ雪ゝ乃ゝ
ひゝゝゝ人ゝゝゝけゝ世中ゝ川ゝ
雪ゝゝゝ入ゝ乃ゝ中将ゝ乃ゝ
ゝ世ゝゝ者ゝゝ者ゝ乃ゝ
ゝゝゝの者ゝひゝゝ入道
春の月ゝひゝ

入ゝ
春ゝ乃ゝ雪ゝ乃ゝ
ゝゝ乃ゝ
ゝゝ乃ゝ
白ゝ乃ゝ
人ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ
朝
ゝゝ世中ゝ
ゝゝ世ゝ乃ゝ中物ゝ
ゝゝ乃ゝ

雲のうへにかすみもけふ春をいとはるるとて
うへ
雪とけのこりなき方なく
山里のとの秋の日の影を
いつこまを春きぬるとはしらねども
すみのの松にかかるまつ
けふけふ三月十日の花のいろいろ
咲ちるなかふ
あてなりとこそ
四月廿日

秋乃夕ゆふ毎人の
月はもやまぬ
安居夜ごとに
風やあの蝉の
八月二十八日
なすとおりて
千世経へてうつむ宮
山里のお柴の河
とわいてまつ

たをけ[illegible]大[illegible]の[illegible]車[illegible]
[illegible]
[illegible]
山里[illegible]
二月十[illegible]
白[illegible]
[illegible]
あ[illegible]
中宮[illegible]
秋の月[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

授記品

あるひとつのこゝろを信ずるものは
北城喩品
いまこの娑婆世界にあるもの
大通智勝品
きたりてこゝにあつまれり
人記品
ことごとくみな菩提をえたり
法師品
法をきくものは唯願をもとむるなり

見宝塔品

[illegible]
提婆品
[illegible]
勧持品
[illegible]
安楽行品
[illegible]
涌出品

たちまちに親のもとにそい老をたれ年あらひを人の行へ
壽量品
出入(む)
出入(む)
分別功德品
きく聞て皆人々成ぶつすべきことを聞
隨喜功德品
つ人のあるたちまちに人のために人をすすめて
法師功德品
法のためにまたまたすすめたてまつれば
不輕品

さてもまたまたこれ程と極つれば法のいまるべきなと
神力品
ねがはくは速に吉日を以て法代代の中に擬とそ
囑累品
ひとすぢにねがひたてまつるそ地法のしるしたは
藥王品
ねがはくは後世をたすけ給へ法を聞へく
妙音品
法のためにまたまたすすめたてまつれば
普門品

陸奥

陸奥国の人、法の力にて生きかへる事

陀羅尼品

陸奥国の人、法の力にて生きかへる事

妙莊嚴王品

国王、法華経を聞き、歓喜して、蓮華を以て仏を供養する事

普賢品

法華経を聞き、歓喜して、蓮華を以て仏を供養する事

法華経を聞き、歓喜して、蓮華を以て仏を供養する事

ゆいまの十はつ、ひ、ぬ、ゆ、あ、の、

ゆいまの十はつ、ひ、ぬ、ゆ、あ、の、

一、こゝ、ろ、ち、み、の、月、の、こ、と、く、

ち、の、ま、ち、ま、ち、ら、ま、の、月、新、月、す、こ、と、く、ま、ち、あ、る、ま、の、月、

ま、の、月、ま、ち、ま、ち、の、こ、と、く、

五、の、月、ま、ち、ま、ち、ま、の、月、ま、ち、ま、ち、

二、月、ま、ち、ま、ち、の、こ、と、く、

陸奥

風俗くまの、ま、ち、ま、ち、ま、ち

法古

当るくらの世界に義は物のくらいなるもの
世界の新乃こと〳〵
世界に生るる物となりひしかみの目は新をみる
この身繼者のことく
あるはたはくるさてはくるさて成の道にあるも海て波り
世界の物雲のかく〳〵
実ものこと身に浮雲にて今果れて跡をのこ
世界にかひらものまく〳〵
いくらつるれてと後に入員の出れるつめもつてもて亀
中宮乃ちに浦の波屏風歌人の家近

く松梅のくるちてあれ前てく人
あるも

梅のくるるあるれ前の青信の浦風波もてもて
峯和中将いまるたのく
ゆえ仏のよるさ新て少ゆるる義に松風ゆかてん
中家のうちはよるの波屏風よりの海て
なる人の家乃門は人をたるく人とおひろ
黄乃人はやてる物をていてんれ
手門は立る人に酒ちて海てそれ立へ世ける
蔵乃鶴ひてる文

[illegible]

花山院のいまはしり

[illegible]

山つゝきのもとにあり

[illegible]

[illegible]

人の家に花のさかりなるを見

てゝ

[illegible]

人の家に松ゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

女院の宴の屏風の詞

[illegible]

春立つ日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七月七日女男[illegible]

[illegible]

花山院の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

梅の花ふりつもりて雪にまがふ三月ばかりの花ざかりに人
大原いりやのいおのもとにたまひてたいしやうを
ちらし合ちらひまけるを題にしてよみてある歌
きさらぎみかの夜上のかなくまして
山ぶきてふ名をもたる題にきたれる人のもとにやはんん
ちの辺の霞
水のゝこりなるを見まおもひつゝ
山里人和歌
うれしかのちらぬ梅ぞ山里にたのしたやいあるしるし
春の雪ふりつもる花
遠里の雪きえぬ梅のうちとけてうつろひもをる
山ぶきの花の日
雪のうちの花ちるうぐひすの声歌を初春
新しくなりぬるひの月
雲間なくしぐるゝ雲間とくもりなき月成社人
かくてなれてまて
六月ばかりの頃ほひ春のことのみをなげき
ゝ
おもひ成ぬるかの秋のあるかの中に数もつもりぬ
中将よりてけるをのみさうくしくて歌

合の振りなどは浴衣

[illegible]

（源氏の君の御ひかりて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

五節

こせちのちうたいの御方にまゐ

[illegible]

[illegible]

九月の雲の上人は

[illegible]

[illegible]

秋の日ぞ深くせかるる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春深き月よりもなほ花ちるを常なるものとなつかしの
今月さるまでもなほ残りてこそあるべ
しとて
今月をすぐしてはなほ残りてあるべしとて
のこりなく
うつりてはかなきさくらの花の
内裏にまゐりて梅ふつかばかりにて
侍るにまゐりつるを梅花
うつり
ふかきに梅の花の
庭にこの月きてみてゆくをみてゆくを
すきはてぬれば
宮の女房
床にも花のあるにふかんとすきてゆく
とりひて後
いかなるものとも
うつり
第五にいつ
せいきう門院
白雪ふりつもるを

うへ

雪消して花さへちらぬかすかの山べ春やたるとさん

又阿闍梨うへ

をちこちに消えて落るこの花の有のみうらやましむ

侍

行くすゑをたづねて春月我をはなれるつみをあはれる

又

山かつ昔春月のもとくてうえんをうつしてうつるを清みなる

院にて種をとりんのひでり

踐

あはれさるる春のよにうるこに教るるとみ書る坊か

道信

みちのくの中将

拾

朝ぼらけ行くすゑとおもふ人をも花はさて我をみるらん

行すゑ中将のくかいのまてはこよあるうる庵

しやうはくこく

かくるる我ぬしをみる時そこのそはをるくみそける

又うへ

をちかたのこのもかるる時をうみきのさくらさくらん

又かも

紅葉は時をかるる我稀葉のあるるをいそめそうん

うへ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うへ

いそのかみ　ふるのやしろの　ゆふしめ　ゆふしめ　ゆふしめ　ゆふしめ

　　　

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan

[illegible]

[illegible]

[illegible]

けしきもやうせくくてあつまを落てうけるはなをる
ちるあめあきこうみまのくてをあやうるくうはを
たるをける
数るはかりをてるなひとあてるをみとをれ
かをる
うはをるけつ成れてへをひとをひやてれ結をる月
芦はをくの年をるこはをまてたをるを
こ行をくをこるをるをたいをあををくを
なを
ひてへを霧小松れをの小
をはをけをを柳のみを春ん
をををを

[illegible]

春[illegible]ゆく船[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なつ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan

かくるかもかくゆくすゑもいとはるかなるこゝろのうちにはなにしあるとけるうへもうふうるのいとをみる道
はかりそはけるくれなゐ
あるひとの法華寺にまいるとて
少将
雲のとも涙のつゆの仏にも祈てのちはいかんとこそ
彼岸に法華寺にまいるとて
和歌
たらちめのかくるさはりやおいたるあまにもとゝんとこそ
少将

来侍りけるのちのことにはかれぬるこゝろのうちにはなにしあるとけるうへもうふうるのいとをみる道
吹上のこゝろのうちにはなにしあるとけるうへもうふうるのいとをみる道
はりとみのたるをくやくちりけるなるたかくこゝろのうちにはなにしあるとけるうへもうふうるのいとをみる道
なるとみたりてこゝろのうちにはなにしあるとけるうへもうふうるのいとをみる道
しらくもの雲の塩ちるもいとをかしけり
物おもふ身にはこゝろのうちにはなにしあるとけるうへもうふうるのいとをみる道

[illegible]

[illegible]

[illegible]

か事
摂津国なにはの浦にて
のぐるの中納言
はまぢ
人のもとにふみ
世のあるまゝに月
ひとくもおもひ
の中にまぎれふつ
人出たりけり

雲のそこにはあらぬ
かへ
形にて月日たゝぬ
人の尾ぬきたる
あくれもいそぐ
う
ふるたに
業物あくまで
少しもあ
おつるなりけ

国立公文書館
National Archives of Japan

山里をとゝのへて春のそらなる山里にいとなの春をしる雲
入道のちゝにあひたるものゝ行ゝ
雪ふる山路をたゞまつ人やあるゝまつ野
うへ〜
ゝゝ人をとゝのはせてゝも海をゝ山路をつゝんでて
かすゝまりて行ゝふる山里をとゝ
なゝしてゝあはせて大のゝをとゝ
明まつ池あさゝの雲とみるうゝ海の里ゝ也
ゝゝあるゝ所ゝ

よゝゝしゝゝ
おゝゝゝ

三笠山はるかに見わたしたるに月の出でたるを人のもとへ

山のはのくもるこころたのもしの月中秋

よしなくてしのぶる夕に我いかに見るとなくなくかたるらん

人〳〵

ひとりのみ涙ぞ袖にしぼれける我ぞ恋はてるしの

九月十五日ごろの月の出でたるを仏にまゐらせたるに

あらひなきこころにて月の知るかなるかぎりあるきの

ぬれぬ袖のこころもとなくなくみるとて

ひとりのみ涙ぞ袖にしぼれける月の出でぬる秋のよの月

稙家

雲間なる月のさえかはるこころをよめる海辺の月

白川

逢坂関にもかの月の出でたるを見て海辺

おもしろきこころをよめる大殿

法橋

春のこころをよめる

又

同

いかなる月に春のこころを見せるらん雲のまにまに月ぞ出づる

ときこそ春のこころをよめる

今よりは花のあるべきの月ぞ春の

女院のすみよりくもまでさそはれるよ公教卿の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文

[illegible]

[illegible]

[illegible]

おもてもとゝ花ゝ咲ける成もうつる我ゝ世ひやうを嘗
みちさたかゝちのくまゝそゝろふめちをまゝつゝ
やうとけるうゝ成さゝ移ひく
今更ゝ慶長元年の春の乃園成つゝめて為ぬへしやは
笛やきゝ乃やゝ〳〵ゝ乃をを
山ゝ吹の風ゝ乃枝ゝ毛ゝ花ゝ咲ひ毛ゝ移りゝ乃ん
月の前乃笛の音
春ゝ毛ゝ乃ゝ〳〵ゝ乃ゝ毛ゝ春ゝ毛ゝ乃ゝ乃ゝ乃

てをみの中にさしくたしてゐたりける
いつ世にかのこれをこれにとまりしを世にかへりて
人〳〵
蓮葉にうゑ置たりしかのまるれ行方をみのの長者をくん
又あまをとりの
けちらしにうつれ行方をたのまねばとてあり
かの
繁あるくにあれあるまも告あんはよりあるをうとみゆる
厳とてはまをきてまをえまをあるひ給ふてれ
なるくとあるひをけるを人あとゆりてまいりぬる

笛乃音をしたしくあるとまをあるまをよりのひかりの光
さらにうるはしき月
まるるまをはきてあるまを花よりあれ濃い近有をてん
八まをくまをて世をあるまをすをるをうをれをを迷
けるをるをうをにれををく
白河の宿のまをまをあるまを迷をを河のある新名樽をみる
女はをあるをまをあるをのをあるをのをあるをの
ことをあるをあるをつをつを白河乃水れ面ををみはるる
をへ乃あるをにまを世を落をたるをまるを
京師のよれをまをまをれをれをひをををを雅

いとゝ水隠れまさりつゝ
ものあはれなり法ひけるに大殿の中将
けるのきこえのふる所
をとこ人のいとたゞけて形をやつしたる
いかゞ
小長谷殿はきゝ給ふ所なくて
よすがまゝうちおもひ給へるに大殿の
春のことなる
若の君をとゝのへ給ふ事乃行末をとゝ
ひとへ

行末をかなしびをもとゝ思ひ給へる
おもしろくなつかしき大殿も
かゝる世にはなすべくもあらぬ
なりけり
長谷の院乃ほとりやうはかすゝ仲忠と
いつ世にかはれるとゝ
うたりやうの女一宮はなをうつくしう方にて
しけるやうまことにあるべきものとふい
をとゝおもひとられ給ふ
をるをとゝひとおこと給ふ

はるさめのそらにしるくもなかめつゝ
　　雨中鶯　　藤原成範朝臣
あるかなきかにひくるうぐひす
かすみこめるはるのゝ風も水のおもにさゞなみのたつ
　　春雨　　藤原為忠朝臣
きゝそめのかねの音乃侵したまふくもの名り
　　清涼殿の東の庭に桜の花の大
　　盛なる
こゝのえやまの花乃ゆゑ物思ふ人ゝ
　　花の下に人々
みやこ山花の雲をかさねてゝ
　　秋歌
左の大臣
ありもてゆくまゝに秋きてくれはてゝ
　　風のうすくなるにつれ
さらぬだにあきかぜ
　　花の
はるのゝ草のうへ
　　秋の
はつ
　　月
はつ
　　月
はつ
　　月

[illegible]

清少納言の月毎にうすむらさ

あるは月の雲間よりわたる月のもとにて[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋院さまの御所にまゐりたるに
しきてあるびやうぶをとりつけ
来て遣とうるはしきに御所さまに
あるひとびとのうつくしきを
かくきすのかりと侍あるをみるに
うつくしう

馬用侍

寛仁二年正月入道殿大饗
侍りけるふ廉風の絵に山里にりみちたる人
きたること

山里の御ものいみ
よりはしめて長谷に侍りけるに入道殿物
のたまはせられしに
若風をなれとしてかくなんかきたる
秋の夕はなにかはかなしきを
新宮くいつのきはのたれ山里の紅葉にうれて秋深にけり
長谷に侍るに
廉の絵の裝束法服をして向
かはりたるをとこ
かくなんかきたるを

なりとて、ぜんあるべきかたのことなれば、
用ゐられぬ人もおもふらん
後朱雀院生田こさせたまひて七夜よ
りきこしめされ、御ぜんにてなりてけるとぞ
聞こえし
我宿の梅の花咲くころ、人々とりあつめて、
歌ども作らせたまふ。紫式部、
めづらしきもの、ひとつ、ふたつ、
よりあひ、いとをかしきに、はかなき
事ども、をかしう言ひ交はしたるに、
花のもとに春を忘れぬ人ばかり
風にしられぬ香をとめてこそ
宣方朝臣
梅の花ちりかひくもるあけぼの
に、
ちりまがふ袖の香をだに
とめてこそ
春の夜の闇はあやなし
梅の花
色こそ見えねかはらざ
るらん
人の心を
春の夜の

右公任卿集以古寫本校合了

内閣文庫

羣書類從卷第二百三十六

国立公文書館
National Archives of Japan